白いのしーしー♥
お漏らししようね♥
お姉さんたちに
精子を
搾ってもらえる
世界
しゃーぷ
希美お姉さんは
ぼくのちんちんを
勝手に触ってくる……

本作品の一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。
また、本作品の内容を無断で改変、改竄等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償に関わらず本作品を第三者に譲渡することは出来ません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
本作品は横書きでレイアウトされています。また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

お姉さんたちに精子を搾ってもらえる世界
著者の他作品紹介

お姉さんたちに精子を搾ってもらえる世界

希美お姉さんは、ぼくのちんちんを勝手に触ってくる。
ズボンの中に手を突っ込んで、パンツの中でちんちんを握ってくるんだ。
ありえないと思うかもしれないけど、本当のことだ。
ちんちんを触られると、ぼくはなんだか不思議な気分になってしまう。くすぐったいような、ふわふわするような変な感じになって、おかしなことになる。
なんでかわからないけど、ちんちんが棒みたいに固くなっちゃうんだ。
そうなると、そわそわして、居ても立っても居られなくなって、希美お姉さんをじーっと見つめることしか出来なくなってしまう。
しばらくそうしていると、希美お姉さんはぼくのちんちんを触るのをやめて、パンツから手を出してくれる。
たまに触られるくらいならまだ我慢できたけど、最近はしょっちゅう、ぼくのちんちんを握って意地悪してくるから、どうすればいいかわからなくなる。

ちんちんを握られてそわそわしているぼくを見て、希美お姉さんは嬉しそうに笑っていた。まるでペットをよしよしナデナデして可愛がるみたいに、目を細めて笑うんだ。

「……可愛い♡」

ぼくが不満げな顔で見つめても、希美お姉さんはそう言って、にっこりと素敵な笑みで笑い返すだけだった。

その顔を見ていると、ぼくはなんだか恥ずかしくなっていつも顔をそむけてしまう。しかも、ちんちんを握られていると、抵抗できなかった。

ちんちんが大事な部分だってことはなんとなくわかっていた。下手なことをしたら、ひどいことをされるかもしれない、というちょっとした恐怖心が心の隅にずっとあった。

いつか絶対やり返してやるぞ、と思っていたけど、なかなか反撃は出来なかった。

○学[illegible]年生のぼくでもわかるのは、兄ちゃんは変な人をお嫁さんにもらっちゃったみたいだ、ってこと。

そう、希美お姉さんはぼくの兄ちゃんの結婚相手なんだ。

希美お姉さんは、兄ちゃんにはもったいないくらい、びっくりするくらい綺麗なお姉さんだ。

しかも、おっぱいが他の誰よりも大きくて、服の前のボタンが弾け飛びそうになっていることがある。

最近ぼくは希美お姉さんに見惚れてしまうことがある。自分でもなんでかわからない。昔はこんなことなかったのに、希美お姉さんの笑顔をぼーっと眺めてしまったり、その柔らかそうなおっぱいを見つめてしまったりする。

もしかしたら、希美お姉さんのことがちょっと好きなのかもしれなかった。

だから余計にちんちんを触られるとどうすればいいかわからなくなる。

ぼくは、この間、希美お姉さんに思い切って聞いてみた。

「どうして、ぼくのちんちんを触るの……？」
「だって、当たり前のことじゃない♡」
「当たり前、なのかな……」
「そうよ。ひろきくんが、どのくらい男の子として成長したか、確かめてるの♡」
「ちんちんなんて触らなくても、どのくらい大きくなったか、わかるじゃん……身長とか、体重とか……」
「違うの♡　そういうことじゃなくて、ね？　ふふ♡」
何か、ぼくの知らない意味があるらしくて、ぼくは反論できなかった。にっこりと笑みを浮かべる希美お姉さんに、結局その日もちんぽを触られた。
モミモミと揉まれたり、タマタマのところをくすぐられたり、くすぐったくてむずむずして落ち着かない。
よくわからないうちにちんぽが固くなってまた棒みたいになってしまって、希美お姉さんは優しく

固くなったちんぽを握ってくれたけど、ひたすらくすぐったいだけだった。
「希美お姉さん……やめてよ」
「気持ちよくなぁい？」
「ないよ……」
「はいはい♡　まだ、ひろきくんはお子様ちんぽだね♡　もうそろそろ、アレが出るころになってもいいんだけどね」
希美お姉さんはよくわからないことを言って、ぼくのズボンから手を抜いた。
アレって、なんだろう……ぼくはそんなことわからなくて、困り果てるだけだった。

ある日、突然にそんなわけのわからない日々は終わりを迎えた。
学校から帰ってきて、テレビを見ていたぼくに、希美お姉さんはにっこりと笑みを浮かべて近づい

てきた。
この時間はお母さんも習い事をしに行くから、いつも家に他に誰もいない。希美お姉さんと二人きり。
ぼくは希美お姉さんの笑みが、ちょっと怖かった。ぼくをとって食おうとでもしようとしている感じがして。
「ねえ、ひろきくん♡　今日もおちんちん触らせて♡」
「やだよ……」
「ひろきくんが嫌でも、触るんだけどね♡　ズボンに手、入れるの面倒くさいから、自分でちんちん出して♡」
「そんなの、恥ずかしいよ……嫌だってば」
「いいから、はやくズボン脱ぎなさい♡　ほらってば♡」
ぼくは結局言いくるめられて、ズボンを下ろされてしまった。そのままブリーフにも指をかけられ

て、するりとくるぶしのところまで下ろされてしまった。
ちんちんは、なぜか今日もまた固くなっていた。
あれ、おかしい……今日はまだ触られてないのに。
しかも、今日はなんだかいつもよりちんちんがムズムズしていた。これまでとは何かが違う。
「じゃあ今日もいっぱい触ってあげるからね♡」
希美お姉さんは、ちょっと頬を赤らめながらぼくの固いちんちんを握った。そのまま上下に優しく撫でさすってくれる。
なんだか、ムズムズが強くなって、ぼくは希美お姉さんの手を止めようとした。でも、無駄な抵抗だとはわかっていた。これまでだって希美お姉さんはぼくが嫌がっても、ちんちんを離してくれたことなんて一度もなかった。このまま我慢するしかないんだ。
「しこしこ♡　しこしこ♡　どう、気持ちよくなってこない？　しこしこ♡　しこしこ♡」
希美お姉さんは、いつもしこしこ♡　って変な掛け声をかけながらちんちんを触った。なんだかいや

らしい響きの言葉で、ぼくはそれがあんまり好きじゃなかった。
「ねえ、やだよ……変な感じ、する……触るのやめてよ……」
「これはね、触ってるんじゃなくて、しごいてあげてるのよ♡　しこしこしごいてもらえると、大人になった男の子は嬉しくなるんだからね♡」
「兄ちゃんも嬉しくなってたの？」
「そうよ？　わたしがおちんぽしごいてあげたら、すっごく喜んで気持ちよさそうにしてたわ♡」
「……」
ぼくはそんなこと信じられなかった。こんなことされて喜ぶなんて、変態すぎる。兄ちゃんはそんな人じゃないと思う。
やっぱり、希美お姉さんが少し変なんだ……そう思いたかった。
段々と、ぼくはちんちんのムズムズが、堪えられないものへと変わっていくのを感じていた。
このままずっと触られて、しごかれていたいという欲求が生まれてた。

よくわかんないけど、気持ちがよくなってきてしまった。
もしかしたら、希美お姉さんの言うことには、正しいところがあるのかもしれない。そんな予感を得ながら、緊急事態が訪れようとしていた。
「希美お姉さん……おしっこ、出ちゃいそう……」
そう、いきなり何か、ちんちんから出そうになってきた。普段なら我慢できるのに、どんどん込み上げてきて、すぐにでも出てしまいそう。
こんなところでお漏らししたくなかった。
「ほんとに出ちゃうよ……手、離してっ」
「うんうん♡　しーしーしても大丈夫だから、お姉さんに任せて♡」
希美お姉さんの目は、どこか怪しげな光でらんらんと輝いていた。これから起こることを心待ちにする瞳。
ぼくのちんちんはぱんぱんに膨れ上がって、ヒクヒクし始める。一生懸命力を入れても、無駄だっ

た。

「あっ、あぁ〜っ」

ぴゅるっ、ぴゅっ……♡

弱い水鉄砲みたいに、ほんの少しの量の液体が出た。勢いよくとんで、それは希美お姉さんの履いていた黒いストッキングを濡らした。